
おさ☆まほ0～幼なじみは☆魔法使い！？Zero～

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おさ☆まほ〇〇幼なじみは☆魔法使い！？Zero〇

【Nコード】

N8672F

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

拙作“おさ☆まほ”こと「幼なじみは☆魔法使い！？」の主人公・市原峻佑と、ヒロイン・ちひろとみちるの双子の姉妹。彼らが幼いころ、何があったのか。“おさ☆まほ”第1話の峻佑の夢の回想シーンも完全版で語られる、“おさ☆まほ”番外編！

VOL. 01.. はじまりの日 (前書き)

初めての方は初めまして、そうでない方はお久しぶりです。

今作は、長編連載作品“おさ☆まほ”こと、「幼なじみは☆魔法使い!？」で語られることのなかった彼らの知られざる過去が描かれます。

なので、そちらを知らなくてもある程度楽しめるとは思いますが、本編を序盤だけでも読んでおいてからこちらを読んでいただくと、もっとお楽しみいただけるかと思います。

VOL. 01.. はじまりの日

——オギヤア、オギヤア……

19XX年7月7日、とある病院で新たな命が誕生した。

「おめでとうございます。とても元気な女の子の双子ですよ」

生まれたばかりの双子を抱き上げた2人の看護師が、ゆっくりと赤子を母親と、出産に立ち会っていた父親に抱かせた。

「ちづる、よく頑張ったな。ありがとう、今回も無事に産んでくれて。もちろん、お前たちもな」

双子の父親、俊之は目を細めて妻と生まれた双子に囁いた。今回も、と言ったのは、彼ら夫婦にはすでに6歳になる長女がいたからだった。

「そうそう、名前を決めてやらないとな。ちづる、2人ともキミによく似ているから、キミが名前をつけてやってほしい」

俊之は、元気に泣き続ける双子をベッドに寝かせてやると、ちづるに双子の名付けを一任すると言った。

「そうね、さとみの時はあなたがつけてあげたのよね。1人目は自分^{おや}がつけたいんだって譲らなかったわよね。そうね……じゃあ、わたしから一字ずつとって、ちひろとみちる——お姉さんにあたる方がちひろで、こっちの妹の方がみちる。これでどうかしら？」

ちづるは、長女——さとみのときのことを思い出してクスリと笑うと、少し考えるそぶりを見せてから、双子の姉妹の名前を俊之に話した。

「うん、すごくいいと思うよ。きっとキミに似て、将来はかわいい女の子に育つだろうね」

俊之が大きく頷きながら言うと、

「あら、あなた？ そんな言い方すると、さとみが将来可愛くならないように聞こえるわよ？」

ちづるは俊之の発言が気に食わなかったのか、ちょっとだけ彼を

からかうように問いかけてみた。

「いや、そういうつもりじゃ……って、また僕をからかってオモチャにしようとしてるな？　大丈夫、さとみは目もところ僕に似ているけど、全体的にはキミの美人の遺伝子を受け継いでいるんだから、心配はいらないよ。さとみもちひろもみちるも、みんなきつと可愛く育つさ」

俊之は一瞬うろたえたが、ちづるがニヤニヤと笑っているのに気づいて、落ちつきを取り戻すと、ちづるの長い髪を撫でながら、そう断言した。

「ちえっ、今回はすぐ気付いちゃったか。でも、そうね、わたしの願いは、3人とも元気に育ってくれること、かな。たぶん、ちひろもみちるも、わたしのチカラ、受け継いでくれると思うから、物心ついたらちゃんと教えないといけないけど、それさえやっておけば、多少の困難は回避できるわ。ちよつとやそつとでチカラに頼るような子には絶対しないけれど」

ちづるはペロリと軽く舌を出して茶目っ気を出すと、真面目な顔になってそう呟いた。現在、この病院の新生児室は彼ら——真野家しかないなので、あまり大きな声を出さなければ、今のちづるのようにおおっぴらにはできない話もできるようだ。

「ちひろとみちるが、魔法使いたるキミのチカラを受け継いでいることは十中八九間違いないと思う。だって、キミは何百年と続く魔法使いの家系の中でも、何世代かに1人いるかないかの、強いチカラの持ち主なんだろう？　魔法使いじゃない僕にはその辺の話はよくわからないけれど、ただでさえそういう不思議なチカラを持つ者の遺伝子って、ただの人間の僕よりは優位に立っていると思うんだ。ほら、中学校の理科で“優性遺伝の法則”って習っただろう？

アレと全く同じに考えるわけにもいかないだろうけど、ある程度は似せて考えていいと思うんだ。だから、きつとちひろやみちるにも、キミのチカラは受け継がれてるさ」

俊之もそういった状況を理解した上で、わざわざ理科的な話まで

持ち出して、ちづるの不安を消そうとした。

「クスッ……ありがと、あなた。ん……やっぱり、ちょっと疲れた、かな。わたし、少し寝るわね。あなたも、昨日からわたしにつきっきりで疲れたでしょう？　わたしは大丈夫だから、一度家に帰って休んでいらっしやいよ。お祖母さまに面倒を見てもらっているさとも、のほうも見てきてほしいし、ね」

ちづるは力説する俊之が面白かったのか、軽く笑うと、ベッドに横になって休む体勢に入った。俊之にも休むよう言うと、自らに眠りの魔法をかけて、瞳を閉じた。

「おやすみ、ちづる」

俊之は、眠るちづるに一言言い残すと、新生児室を後にしたのだった。

同じ日、隣町の市立病院で、峻佑という名の男児が誕生した。初めての子宝に夫婦は喜び、その日のうちに赤飯が炊かれて病院に届けられた。

峻佑と、ちひろ、みちるの双子の姉妹。同じ日に生まれたこの3人がいずれ出会うのは、偶然か、それとも運命か――

それは、まだ誰にも――そう、魔法使いのちづるでさえも知る由のないこと。

VOL. 01.. はじまりの日（後書き）

本編はコメディでやってましたが、この過去編はちょっとコメディ的な要素は薄いので、ジャンルをその他でやっていきたいとします。

VOL. 02..チカラの目覚め

それは、ちひろとみちるが1歳になるかという、ある晴れた昼下がりであった。その日、小学校から帰ってきたさとみは、母親のちづるに代わって、姉としてちひろとみちるの面倒を見ることを引きうけていた。ハイハイを覚え、部屋の中をあちこち動き回る2人を落ち着かせるため、さとみは2人にお気に入りのオモチャを持たせて遊ばせることにし、ちひろとみちる、それぞれにオモチャを手渡した。と、その直後、さとみは目を疑った。ちひろが自分に渡されたオモチャを宙に浮かべていたのだ。

「おっ、おかーさん！ 大変、大変なのっ！ ち、ちひろがっ！」
さとみはすぐさま部屋を飛び出して、隣の部屋にいるはずのちづるを呼びに行った。

「あらあら、さとみ。どうしたの、そんなに慌てて。ちひろがどうしたの？」

ちづるはさとみの慌てっぷりなど意に介さぬ様子でゆったりと訊ねた。だが、

「ち、ちひろが、魔法を使ったみたいなのっ！」

さとみのこの一言に、ちづるはさすがに驚いて、さとみとともにちひろたちが遊んでいる隣の部屋へ向かった。すると――

「これは……想像以上ね。わたしの娘だから、それなりのチカラはあると思っていたけど……。まさかこんなに早くチカラに目覚めるなんてね」

ちづるが部屋に入ると、なんとちひろだけでなく、みちるも自分のオモチャを宙に浮かべて遊んでいた。さらに、どっちがやっているのかはわからないが、床に転がっていた他のオモチャも、ふわふわと部屋の中で浮かんでいた。

「これって、もしかして私以上にチカラが強いつてことなのかな、おかーさん？」

さとみはなんとなく面白くなさそうな表情でちづるの裾を引いて訊ねた。

「そうね、たぶん、ちひろやみちるのほうが総合的には上だと思うわ。でもね、さとみ。あなただって、決してチカラが弱いわけじゃないわ。それだけは忘れないでいて。それに、まださとみだって7歳になったばかりで、成長途中なのよ？ もちろん、ちひろやみちるだって成長はするけど、いろいろある魔法の系統、どれが得意になるかはまだわからないの。わからないけれど、集中的に練習することで、得意分野を伸ばし、苦手を克服することもできる。だから、今は強いとか弱いとか、気にしなくていいのよ」

ちづるは、さとみを抱きしめながらそう言って諭した。

「うん、わかった！ 私、いっぱい練習する！」

さとみは笑顔を取り戻し、力いっぱいに宣言した。

「それじゃ、さとみ。ちひろとみちるをこのまま放っておくと、外を歩いている人に魔法を見られてしまうかもしれないわ。だから、止めるわよ。お姉さんなら、できるわよね？」

ちづるは、力強く宣言したさとみを立たせると、未だにオモチャを浮かべて遊んでいるちひろとみちるを止めるよう言い聞かせた。

「うん！ 私、お姉さんだもん！」

さとみは、大きく頷くと、ちひろやみちるが浮かべているオモチャに指先を向けると、簡単な風を起こす魔法を放ち、次々と撃ち落としていった。

「あー、うー」

しかし、いきなりオモチャを取られた赤ん坊2人が黙っているわけもない。唸り声を上げると、2人の小さな手が光り始めた。

「えっ——」

さとみが2人の手から発せられる光に気づいて声を上げた時には、その光は小さいながらも立派な攻撃魔法として、さとみに向けて放たれていた。

「さとみっ！」

だが、その魔法はさとみに当たることなく、さとみの前で霧散した。ちづるが、すんでのところで防御障壁を張って止めたのだ。

「お、おかーさん……」

さとみは、まさかの展開に言葉を失ってちづるに泣きついた。そして、平然と攻撃魔法を放ってみせたちひろとみちるはというと、

「すー、すー」

どうやら今の攻撃魔法で疲れてしまったようで、その場に転がって眠ってしまった。

「この子たち、どこまで規格外の能力を持ってるのかしら……？」

弱冠1歳にして攻撃魔法を放つなんて、ね。さとみ、怖い思いさせてごめんね」

ちづるは再びさとみを抱きしめてあやすと、眠ってしまったちひろとみちるをベッドへ寝かしつけたのだった。

VOL. 03：引越し

ちひろとみちるも4歳になり、少しずつ物事の分別もついてきたころ――

「おひっこし？」

ある日の夜、さとみたち3姉妹は、両親である俊之とちづるからいきなり引越しの話をされていた。

「そうよ。お隣の竹崎市に新しくおうちを買ったの。いま暮らしているこの家もだいぶ古くなっちゃって、そろそろあちこち直さないと壊れちゃうからね。だから、その間の仮住まいみたいなものよ」

ちづるが言うとおり、現在一家が暮らしている松海市内でも3本の指に入る広さをもつこの洋館だが、建てられたのはちづるが生まれるよりも前の話だったらしいために、老朽化が進み、本格的な修繕が必要なまになっていたのだ。

「そこで、だ。今はこの広い家の中で自由に魔法の修行をさせてきたけど、今度の家はここと比べるとだいぶ狭くなる上に、住宅地のど真ん中だから、ご近所さんもしっぱいいいるんだ。だから、向こうの家では魔法はほぼダメってことになるよ。さとみはもうお姉さんだから大丈夫だろうけど、ちひろとみちるは大丈夫かな？　魔法を使わない、って約束できる？」

俊之は、3姉妹の目線までしゃがむと、3人の目を見て言った。

「わかった！　私は大丈夫だよ！」

「あたしたちも！　ね、みちる！」

「うん！」

さとみ、ちひろ、みちるの3姉妹は、それぞれ元気いっぱいに頷いて返事をした。

それから数日後、一家は竹崎市にある新居へと引越してきた。

「おーい、さとみ、ちひろ、みちる。お隣に挨拶に行くから降りてきなさい」

ある程度荷ほどきが終わったところで、俊之が上階うえの部屋をあてがわれた3姉妹を呼んだ。

「はーい！」

3人は元気よく返事すると、階段をドタドタと駆け降りてきた。

「こちら、女の子なんだからもう少しおしとやかにしないと……。お隣の市原さんには、ちひろとみちる、2人と同じ年頃の男の子がいるって聞いたぞ？　元気なのはいいことだけど、おてんばな女の子は男の子に嫌われちゃうよ？」

俊之は苦笑しながら、3人に注意をした。

「はーい……」

とたんにしゅんとして、反省している様子の3人だった。

「こんにちは、隣に越してきた真野ですが」

俊之が隣の市原家のチャイムを鳴らして呼びかけると、

「はいはい、今出ますよ、っと……」

などと言いながら、サンダルをつっかけて壮年の男性が出てきた。「どうも、今日引越してきました真野俊之です。こっちが妻のちづると、長女のさとみ、次女と三女は双子で、ちひろとみちる。ほら、ご挨拶しなさい」

俊之が挨拶すると、ちづるもペコリとお辞儀をし、さとみたち3姉妹も前を出して挨拶するように促し、それぞれがお辞儀をした。すると、

「これはどうもご丁寧に。私は、市原優佑ゆうすけと申します。ちょっと、待っててくださいね。こちら妻と長男を連れてまいりますので」

優佑は、いったん家の中へ引っ込み、30秒ほどでまた出てきた。

「お待たせしました。妻の絵美えみと、長男の峻佑です。ほら、峻佑。新しいお友達だよ」

優佑が峻佑に挨拶するよう促しても、峻佑は優佑のズボンの裾を

つかんで隠れたまま、どうしようか考えているように見えた。と、じっと見つめるちひろとみちるの双子の姉妹と目が合った。それで意を決したのか優佑のズボンを放して前に出てくると、

「い、いちほらしゅんすけ、4歳です！ えっと――」

峻佑はとりあえず自己紹介してみたが、相手の名前がわからないことに気づき、赤面して固まってしまった。

「あたしは、ちひろ。まのちひろ。おんなじ4歳よ。よろしくね、しゅんすけくん！」

「あつ、お姉ちゃん先にずるい！ 私はみちるです。よろしくね、しゅんすけくん！」

そんな峻佑の様子を見て、姉妹は自分たちがさっき挨拶したときは峻佑がいなかったことを思い出し、助け船を出す意味で改めて自己紹介した。

「えっと、ちひろちゃんと、みちるちゃん。うん！ よろしく！」

困った顔をしていた峻佑だったが、姉妹の名前がわかると、ぱあっと顔が明るくなって、2人の名前を確認するように呟き、よろしくと言った。

それからというものの、晴れた日は外で、雨の日は家でと、ほぼ毎日のように峻佑とちひろたち姉妹は遊んでいた。時々ではあったが、姉のさとみも加わって4人で近くの公園へ出かけて遊び、その時はたいていさとみも含めて全員泥まみれになったりし、両家から笑いが絶えることはなかった。

VOL. 04.. バイバイ!

毎日のように一緒に遊び、5歳で幼稚園に通うようになってからは、より一層仲良しだったちひろ・みちる・峻佑の3人。しかし、ずっと一緒だと思っていた3人にも、別れは唐突に訪れるのだった。きっかけは、とある日の真野家の夕食でのことだった。食べ終わったところで、俊之が突然口を開いた。

「長引いていた家の修繕が終わったみたいだから、近いうちに向かうの家へ戻ろうと思う」

どうやら、一家が住んでいた家の工事が終わったらしい。修繕のために真野家が竹崎に引っ越してきてから、1年半が過ぎていた。

「そう、ようやく終わったのね。この家も、ちょっと手狭なことを除けば悪くないと思っていたけど、やっぱりあっちの家のほうがのびのびとできそうね」

ちづるはひとつ頷くと、松海に戻る日が待ち遠しい様子で話した。

「ねえ、お父さん。向こうに戻るってことは、私の小学校や、ちひろたちの幼稚園はどうするの？」

うきうきと楽しそうな両親に、さとみが疑問をぶつけると、

「そうだな、幼稚園はともかく、小学校は松海から通うには遠いから、そっちへ転校することになるだろうな。友達と別れるのはつらいかもしれないけど、さとみはお姉さんだからわかってくれるよね？」

俊之はこともなげに話したが、転校という言葉聞いて、明らかにさとみの表情が暗くなった。

しばらくの沈黙ののち、さとみが何かを思いついたのか、顔をあげた。

「ねえ、お母さん。私たちは魔法使いなんだから、ちょっと遠い場所でも、テレポートとかで通えば——」

さとみは興奮気味にちづるに提案しようとしたが、

「ダメよ。確かにさとみの言うとおり、わたしたちのチカラを使えば距離なんて無意味だけど、小学校は今まで通り公立のところに通わせるから、学区っていう制限がかかるのよ。クラスの他のお友達が学校の近くに住んでる中、さとみだけ遠くから、なんてことはできないの。それに、チカラを使うところを見られると後が大変ですよ？」

「だから、その方法はダメ」
ちづるはさとみの言葉を遮って却下してしまい、さとみはガックリとうなだれた。

「まあ、いろいろと手続きもしないといけないし、引っ越しは今度の日曜にしようか。さとみたちは、それまでにお母さんと一緒に自分たちのお部屋を片付けて、仲のいいお友達とかには引っ越しをすることを話しておくんだよ」

俊之は少し考えると、引っ越しの日取りを決めて、さとみたちにも準備をするよう話した。

「はあーい……」

さとみは少し不満げな顔をしていたが、どうにもならないと判断し、諦めて夕食の片づけを始めたのだった。

そして、あっという間に日は流れ、土曜日の夕方。ちひろとみちるは幼稚園が休みの今日、昼前から峻佑と一緒に近くの公園で遊んでいて、日が暮れてきたところで帰ってきた。すると、

「それじゃ、ちひろちゃん、みちるちゃん。またあしたね！」

姉妹の引越しの話を知らない峻佑は家に入る前に、姉妹とまた明日遊ぶ約束をしようとした。と、この言葉に、今まで言い出せなかった姉妹の決心が固まったらしく、

「しゅんすけくん！」

玄関のドアに手をかけていた峻佑をみちるが呼び止めた。

「なーに、みちるちゃん？」

峻佑はいったんドアから手を放し、姉妹のところへ戻ってきた。

「あのね、あしたはあそべないの。ううん、私たち、おひっこしすることになっちゃったから、きょうがさいごの日なの」

みちるは辛そうな顔をしながらも、ついに峻佑に別れを切り出した。

「そうなんだ……。わかった！ あした、みおくりにくね！」

みちるからの衝撃の告白に、峻佑は残念そうな顔をしたが、実感がわかないのか、それとも単に切り替えが早いのか、すぐに翌日見送りに行く話をし、その日は別れた。

そして、夜が明けた。

真野家の前には引越しの大型トラックが止まり、荷物を積み込んでいる。そして、ほどなくすべての荷物が積み終わり、一家そろってその様子を見ていた峻佑のところへやってきた。

「1年半という短い時間でしたが、お世話になりました」

俊之が優佑にそう言って一礼すると、

「いえいえ、引越された先でもどうかお元気で」

優佑もペコペコと挨拶を返していた。

「ほら、ちひろ、みちる。これで当分は峻佑くんと会えなくなるから、行ってきなさい」

ちづるがちひろたちに峻佑と別れを済ませるよう促すと、

「しゅんすけくん……」

2人とも言葉にならないのか、峻佑の名を呼ぶだけだった。

「ちひろちゃん、みちるちゃん。きつと、きつとまたあえるよね？」

そんな2人の様子を見て、やっと峻佑にも別れの実感がわいたのか、峻佑のほうから動いて2人に訊ねた。

「うん……うん！ きつと、きつとまた会おうね！ あ、そうだ。

しゅんすけくん、これ、あげる。これを私たちだと思ってもっていい。あと、またあうためのおまじないっ！」

峻佑の問いかけに、2人は頷くと、それぞれ腕につけていた小さ

なブレスレットを外して峻佑に手渡し、そのまま峻佑に近づくと、両側の頬に2人同時にキスをしたのだった。

「……………」

突然のキスに放心状態の峻佑から離れると、

「それじゃ、しゅんすけくん！ バイバイ！」

2人はちづるたちのところへ駆けて行き、一家は先に出発した荷物のトラックを追いかけて車を発進させた。

「ばいばーい……」

峻佑はいまだぼーっとしたまま手を振っていた。その手に、もらったブレスレットを握り締めて。

VOL. 04..バイバイ! (後書き)

あらすじに書いた『おさ☆まほ』の第1話、峻佑の夢のシーンの真相、いかがでした？

残り2話のZero、前後編で明後日更新。

VOL. 05..5年後…(前編)

——これは、姉妹が5歳で峻佑と別れたあと、高校で再会するまでの空白の期間の一コマの話。

真野家が竹崎から松海に戻ってから5年の月日が流れ、ちひろやみちるは松海市立松海台小学校の4年生に、峻佑は竹崎市立竹崎第三小学校の同じく4年生になっていた。

いつものようにちひろとみちるが仲良く登校して4年1組の教室に入ると、にわかに教室が騒がしかった。

「松田くん、何かあったの？」

ちひろはランドセルを机に置くと、隣の席にいる男子に聞いてみた。

「ああ、真野さん。おはよ。あふ……なんか、今日このクラスに転入生が来るらしいよ。職員室に学級日誌を取りに行った夏目^{なつめ}さんが、カッコいい男子を見て、先生に聞いたらそう言われたんだってさ」

松田は眠いのか欠伸をしながらも、今日の日直当番の夏目を指差して事情を話した。それを聞いてちひろとみちるが教室を見回すと、なるほど確かに騒がしいのは女子だけで、いつも騒がしい男子はむしろ冷めていた。

「へえ……転入生か。どんな人なんだろう？　まあ、いっか。ありがとうね、松田くん」

みちるは眠そうにしながらも教えてくれた松田に礼を言い、松田は照れたのか顔を赤らめていた。

「そんなわけで、今日からこのクラスの仲間になる、九崎 翼くんだ。九崎くん、自己紹介をして」

朝のホームルームで担任の夕海が転入生を紹介し、自己紹介をするよう促すと、

「はい。ええと、九崎 翼です。ここに来る前は梅津市に住んでました。皆さん、よろしくお願いします。ついですが、特技をひとつ。コレは、ぼくからのささやかなプレゼントです」

翼は簡単に自己紹介を済ませてお辞儀をすると、おもむろに右手を羽織っていた上着の中に入れて、すぐに出した。すると――

「な、なんだ!？」

「うわあゝ!」

「きれーい!」

教室の中にバラの花が舞い、教室内は驚きと歓声に包まれた。

「喜んでもらえたみたいでよかった。わざわざ手品を仕込んだかいがあったかな。ところで先生、ぼくの席ってどこでしょう?」

翼は満足そうに頷くと、夕海に訊ねた。

「……っと、つついバラに見入っていた。しかし、九崎くん。私も結構教師になって長いけど、転入初日にこんな派手なことやってくれたのはキミが初めてだよ。で、席だったね。九崎くんの席は……じゃあ、真野。真野ちひろの後ろにしよう。誰か、空き教室から机とイスを持ってきてやってくれ」

夕海はあんぐりと口を開けたままボーっとしていたが、ハツとしたように翼の席を決め、机とイスを運ぶよう頼むと、ホームルームを切り上げた。

机とイスが運ばれてくるまでの間、翼の周りには人だかりが形成され、

「ねえ、さっきの手品すごかったね。どうやったの?」

などと翼を質問責めにしていた。一方、それを少し離れたところから見ていたちひろとみちるは、

（お姉ちゃん、いまさっき九崎くんがやったのって……）

（うん。手品だなんてごまかしていたけど、あたしたちの目は騙せない。あれは――魔法ね）

会話が周囲に聞こえないように、テレパシーを使って話していた2人。ちひろが話しながら、翼が本当に魔法使いなのか確かめようと、魔法使いなら自然に身の回りに展開させているはずの防壁の有無を調べるため、消しゴムのカケラをひとかけら、翼に向けて弾丸のごとく射出した。と、

――パシィッ！

消しゴムのカケラは、翼の頭に当たる寸前のところで粉々に弾け飛び、消滅した。

（えっ！？）

ちひろは驚いて声をあげかけたが、すんでのところでこらえた。翼が振り向かないところを見ると、どうやら気づかなかったらしい。授業開始のチャイムがなる中、ちひろとみちるはどうやって翼から話を聞き出そうかと考えをめぐらすのだった。

給食後のお昼休み、相変わらず人だかりの出来ている翼の周囲。

それまでは遠巻きに様子を見ているだけだった姉妹だったが、ここで動いた。

「九崎くん、一応、私学級委員だし、軽くこの学校の中を案内しようか？」

学級委員を務めているみちるが人垣の中に突撃して翼の目の前に出ると、他のクラスメートを押しつけながらそう提案した。

「なんだよ真野妹。いきなり突っ込んでくるなって。九崎くんの手品が見えないだろうが」

最前列にいた男子がみちるに文句をつけながら押し返そうとする。その言葉にみちるが翼の方を見ると、翼は朝の自己紹介で見せたものとはまた違う“手品”をやってみせていた。だが、ひと段落ついたところで出したものをすべてしまうと、立ち上がった。

「えっと、真野さん……だっけ？ 案内、してくれるの？」

どうやら翼はみちるたちに案内してもらうために、“手品”を切り上げたらしかった。

「え、あ、うん。やっぱり、どこに何があるかくらいは知っておいた方がいいと思うから。じゃあ、私とお姉ちゃんについてきて」

みちるは頷くと、ちひろと一緒に翼を連れて教室を出た。教室の中では、さっき文句をつけてきた男子とかがブーイングを飛ばしていたが、みちるもちひろも聞こえないふりをしたのだった。

VOL. 05..5年後…(前編) (後書き)

後編へ続く。

かくしてみちるとちひろによる、翼のための簡易校内案内ツアーは始まった。まずは教室のある3階から1階へ下り、図工室や音楽室、図書室などがある特別教室棟——と言っても校舎から渡り廊下でつながれたプレハブ状の掘っ立て小屋、と言った方がしっくり来るような建物へ行き、各教室をざっと案内すると、次に校舎へ戻って2階にある職員室は通り過ぎ、隣にある校長室の前で立ち止まって小話——実は校長はヅラだった、そう話した瞬間に中から本人が出てきて慌てて逃げ出したりしながらも、3人は最後の場所——屋上へ続く扉の前へやってきていた。

「あれ、この先って屋上だよな？ 屋上って、自由に出ていいの？」
普通、中学や高校ならともかくとして小学校の屋上は閉鎖されていることが多い。翼が以前いた学校もそうだったのか、屋上の扉を開けようとしているみちるとちひろに訊ねた。

「うん、出れるよ。そっか、九崎くん、校舎の正面からしかこの学校を見てないから、屋上がどうなってるのか知らないんだね。まあ、見ればわかるよ」

首を傾げる翼をよそに、みちるは屋上への扉を押しあけた。今日は朝から快晴だったので、てっきりまぶしいものだと思い込んで半ば目を閉じていた翼だったが、どうにも様子がおかしいので、しっかり目を開けて扉の向こうへ出てみた。

「あれ……？ 屋上なのに、壁……？」

翼はそこに広がっていた光景に、頭が混乱しそうだった。確かに自分たちは階段を最上階まで上がってきた。案内してくれた姉妹も屋上だと言っている。だが、そこにはガラスの屋根と壁で閉鎖された空間。太陽の光もガラスの屋根でだいぶ弱められていて、全くまぶしさはなかった。説明を求めるように姉妹の方を見ると、

「この部分は、校舎の裏側に位置していて、正面からだ完全に死

角に入って見えない場所なの。で、屋根や壁がある理由なんだけど、元々は屋根なんてなくて、普通の学校みたいにフェンスがあるだけの開けた屋上だったみたいなんだけど、何年か前に不幸な事故が起こってからは、屋根と壁でふさいで、屋上庭園として扱うようになったの。ほら、窓もないから、これなら事故が起こる心配もないってことらしいわ」

ちひろがこの“屋上庭園”について話すと、翼はようやく合点がいったようだった。

「なるほどね。ここが最後ってことは、あとは教室へ戻るだけだよね？　ありがとう、真野さん。そろそろ、戻る？」

翼は頷くと、みちるとちひろに礼を言っ教室へ戻ろうとした。と、そのとき。

「待って。あたしたちがわざわざここを最後に選んだのには、理由があるのよ。ちょっと、誰もいない場所で話がしたかったの」

ちひろが翼を呼び止め、いよいよ本題に入ろうとした。みちろが学級委員だからといって、わざわざ校内の案内を買って出たのは、こういう理由からだった。

「話？　ぼくの顔に何かついてる？」

翼は2人が何の話をしようとしているのか本当にわからないのか、それともトボけているのか、首を傾げて訊き返した。

「朝、自己紹介の時に“手品”と言ってたアレなんだけど、あれは手品じゃないんじゃない？　九崎くん、あなた一体何者なの？」

ちひろがズバツと本題に切り込んだ。対する翼はさほど動揺した様子は見せずに、

「何者、って言われても、ぼくはぼくだよ。それとも、何？　あれが手品じゃないっていう、何か確固たる証拠とかあるの？」

翼は逆にちひろとみちろに詰め寄る格好になって問いかけた。

「確固たる証拠かどうかはわからないけれど、ひとつだけ言えることがあるわ。九崎くんが手品をやるって言って、その上着に右手を突っ込んだ瞬間、その右手がうっすら光ったのよ。おかしいわよね、

手が光るなんて。ホタルとかじゃあるまいし」

ちひろが勝ち誇ったように翼に言うと、

「ちえっ、見えてたの？　そう、あれは手品とは違うよ。真野さん、キミは魔法って信じる？」

諦めたように首を振って手品じゃないことを明かすと、翼はちひろとみちるに訊ねてきた。

「魔法？　おとぎ話とかに出てくるような、あの魔法？」

ちひろはいきなり自分も魔法使いだとネタばらしするつもりはな
いのか、最初は普通の人っぽい演技を試みることにした。

「そう。その魔法。ぼくの家は、何百年と続いている、魔法使いの
家系なんだ」

翼はどうやらちひろが演技をしていること、それを横で見ている
みちるが笑いをこらえていることにも気づいてないのか、話を続け
ていた。

「ふーん、魔法ねえ……」

ちひろはあくまで普通の人っぽく、うさんくさそうな表情でつぶ
やき、みちるはもうそろそろ我慢できなくなって吹き出しそうなく
らい表情が歪んでいた。

「やっぱり、信じられないかな。それじゃ、こんなので、どう？」

翼は軽く首を振ると、キョロキョロとあたりを見回し、花壇の小
石を見つけると、ちひろに手渡し、自分に向けて思いきり投げるよ
うに言った。ちひろは驚いたが、自信がありそうな翼を見て頷くと、
小石を受け取って腕を大きく振りかぶった。

「いくわよっ！」

投擲された小石は、翼の顔面めがけて飛んで行き、直撃——しな
かった。さっき教室でちひろが放った消しゴムのカケラと同じよう
に、直撃寸前のところで、見えない何かにぶつかって勢いが衰え、
そのまま落ちた。消しゴムと違って消滅しなかったのは、単純な材
質の硬さの違いだった。

「どう？　これで、少しは信じてもらえた？」

何事もなかったかのように翼が訊ねると、ついにみちるがこらえきれずに吹き出してしまった。

「あははは！ 私、もう我慢できない……！ 九崎くんもお姉ちゃんも真剣そのものだから笑っちゃいけないと思ったけど、もう無理」

みちるは床に座り込み、バンバンと床を叩きながら悶えていた。

「どうしたの？ ぼく、何かおかしいこと言った？」

事情が全く呑み込めず、目をしばたかせながら訊ねる翼に、

「もう、みちるってば、笑ったらダメでしょうが。ごめんね、九崎くん。試すようなマネをしたりして。みちるが笑ったのは、決してあなたをバカにしたわけじゃないの。単に、あたしがいつまでも演技してるのがおかしかっただけなのよ」

ちひろは嘆息して翼に謝った。

「演技？」

まだ状況が呑み込めてないのか、翼はポカンとした表情のまま。

「九崎くん、魔法は必ずあるわ。だって、あたしやみちるもあなたと同じ、魔法使いの家系なんだから」

ついにネタばらししたちひろに、

「ええ——っ！？ そ、そうなの！？」

翼は驚いて叫び、みちるのほうを見て訊ねると、みちるは無言で頷いた。

「ほら、この通り。うちも、確か何百年って続いている家系だって母さんが言ってたわね」

ちひろは証拠を見せるように、自らの身体を浮かせてみせた。

「そうだったんだ……そりゃ、ぼくのことも見破れちゃうわけだね。ところで、2人が魔法使いだったのはクラスの人たちは知ってるの？」

ようやく納得いったように、ふう、と一息ついてから、翼は2人に訊ねた。

「ううん、みんなは知らないよ。一般人には極力知られないように

しなさいってお母さんに言われてるからね」

みちるは首を振って否定した。

「そっか。じゃあ、このことはぼくたち3人だけの秘密ってことなんだね。どっちも真野さんじゃわかりにくいし、ちひろちゃん、とみちるちゃん、でいい？」

翼は頷くと、2人の呼び方を再確認して、よろしく、と手を出した。

「うん、じゃああたしたちも翼くん、って呼ぶわね。よろしくね、翼くん！」

2人も頷いてそれぞれ手を出し、3人は友情の証の握手をしたのだった。

それから2年半後、小学校を卒業すると同時に翼は再び引越してちひろとみちるの前から姿を消した。また、ちひろとみちる自身も私立の女子校、松海学園^{まつみがくえん}へ進学したので、仮に翼の引越しがなかったとしても、離れ離れになることは変わりなかったのだが――

VOL. 06..5年後…（後編）（後書き）

これで完結です。

もともと、この作品自体が「2」（仮）へのひとつの流れなので、「2」始動の際にはまた読んでいただければ、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672f/>

おさ☆まほ0～幼なじみは☆魔法使い！？Zero～

2010年10月8日15時31分発行